様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６３３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６３５２３

研究課題名（和文）多文化共生の感受性を育む周産期看護者育成プログラムの実施と評価

研究課題名（英文）Implementation and evaluation of an educational transcultural nursing program for perinatal nursing staff in the multicultural society

研究代表者
五十嵐　ゆかり（IGARASHI, Yukari）

聖路加国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：３０３６３８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、看護者が様々な背景を持つ対象に対応できる「多文化共生の感受性を育む周産期看護者育成プログラムの実施と評価」を行うことであった。研究方法は、第１段階：これまで作成したプログラムを基盤としたプログラム開発、第２段階：本調査、第3段階：研究結果のデータ分析を行い、普及をめざし国内外の学会で公表した。また、教育プログラムの実施と評価と並行し、外国人ケアへの意識づけを目的とした研修会「ヘルスケア・カフェ」も定期的に企画した。今回の教育プログラムと研修会は、自ら語学や異文化を学ぶこと、さらには外国人に対する意識や態度を変えることのきっかけとなり、外国人医療の向上につながる変化があったと考える。

研究成果の概要（英文）：This research is to implement and assess ‘ the program to train perinatal nurses to nurture a multicultural sensitivity ’, which enables nurses to accommodate patients from diverse backgrounds.The research method consists of three steps; the program development based on programs we have previously built: the main survey: and publications of the results at both domestic and international academic conferences after analyzing the data.At the same time, the researcher regularly organized and held a workshop named ‘ Healthcare Cafe ’ to raise a consciousness of a care for foreign patients. The researcher believes the program and the workshop have encouraged nurses to learn different languages and cultures and also made a change in minds and attitudes towards foreigners. Accordingly, it has improved the medical care system for foreign patients.

研究分野：看護学・生涯発達看護学

キーワード：多文化共生　外国人　周産期　教育プログラム

１．研究開始当初の背景

2011 年の外国人登録者数は 2,078,508 人であり、我が国総人口の 1.63%であった。父母いずれかが外国人の場合の出生数は、1995 年に 2 万件を超えてから一定件数を維持し、2011 年は 20,311 件を示した。このように外国人が家族を形成して社会の一員となりつつあり、出産が増加しているが、実際に外国人にケアを提供している臨床現場では課題が多いのが実状である。

外国人医療における課題は、竹田（2010）の分類を参考にすると、（1）言語・コミュニケーションの違い、（2）情報不足（文化慣習、医社会経済、医療制度の違い）に 2 つに大別される。これらの課題が根底となり、ケアを提供する看護者側は、外国人に対する①説明や指導の不十分さ、②異文化に対する苦手意識や無関心な態度、などによる関係の希薄さ、あるいはステレオタイプな観念によって、ケアの質の低下をもたらしている（林ら、2002；新實ら、2004）。このケアの質の低下が、特に産科領域においては外国人妊産褥婦の健康障害を引き起こし、①切迫流産や妊娠貧血などへ内服ミスによる症状悪化、②説明・理解不足による妊婦定期未受診、③緊急時のインフィームドコンセント不足によるトラブル、④産褥期の育児支援の不足からのマタニティブルーの発症、といった状態を招き、母子が危険な状況に陥ることも多々ある（小笠原、2004；井上ら 2005）。そして、本来、女性にとって貴重なライフイベントである出産が、看護者との言語・コミュニケーションや情報不足の障壁から、孤独感・疎外感を助長する辛い体験となってしまっている（藤原、2007）。

研究代表者の五十嵐（旧姓：藤原）は、これらの外国人医療の現状から 2004 年～2005 年に「異文化からの人々への妊娠・出産・産褥に対する文化を考慮したケアモデルの開発(課題番号：1679139)」という課題で助成をうけ、看護者のケアの困難感を解決するためのケアツールの開発として、6 つの産科のケア場面を抽出し、多言語のパンフレットを作成した。パンフレットは、中国語、タイ語、タガログ語、スペイン語、英語、日本語を約3万部配布し、外国人に非常に喜ばれたと同時に、医療関係者から有効なリソースであったとフィードバックをもらった。その後、2006 年に多文化医療サービス研究会（RASC)を立ち上げ、パンフレットの改定を行い、現在 9 言語（英語・中国語・韓国語・タガログ語・タイ語・ベトナム語・フランス語・ポルトガル語・ドイツ語）で産科の情報小冊子を全国に無料提供している。全国数か所の病院施設や自治体で使用されており、現在も紙媒体での情報小冊子の必要性は継続している。

また、ケアにおける多言語サポートの選択肢を増やすため、2007 年～2008 年に「ユビキタス IP-TEL 産科医療通訳システムの開発（課題番号：19659598）」に協力し、産科における電話通訳の構築の検討に貢献した。さらに、2008 年には Culturally congruent care の概念分析を行い、日本における外国人へのケアにおける定義の明確化と概念モデルを作成した。2009 年の聖路加看護大学の博士学位論文で、「在住外国人女性が評価する出産ケアの質 - 多文化共生社会における文化を考慮したケアの発展に向けて -」を課題として研究をまとめた。その結果、外国人女性は、言語・コミュニケーションの障壁を軽減する支援や通訳サービスの構築も必要としていたが、それ以上に、同じ言語を話すことよりも自分を患者として尊重する看護者を切望していた。つまり、外国人の受け入れ側である看護者の態度が課題であることが浮き彫りとなる結果を得た。さらに、出身国別に文化的背景を反映した日本人女性とは異なるニーズやケアに対する評価の違いも把握することができた。この結果から、看護者教育を検討するために 2011 年はオーストラリア、2012 年はデンマークの移民・難民に対するケア教育を行っている医療施設を視察した。その結果から2011年～2012年は、外国人対応を習得するための周産期看護者の教育プログラム（初版）を作成し、パイロットテストを行っ

た。

歴史的に多民族な諸外国においては、外国人支援とともに受け入れ側の課題の解決にも先駆的に取り組んできている。たとえば、オーストラリアの Multicultural center for women's health (MCWH) は、移民女性のリプロダクティブヘルスに注目し、政府から助成を受けて医療者に定期的なセミナーを開催し、啓蒙活動を行っている。また EU 加盟国の中の 12 病院が協力し、移民者の健康保持・増進のため Migrant Friendly Hospitals project (MFH;移民に優しい病院プロジェクト)が施行され、医療者向けのトレーニングも行われている。さらに MHF では、母子保健を強化するプログラムも焦点化されており、外国人の周産期におけるケアが重要であることは国際的にも明らかである。

日本においては、国レベルでの外国人母子への支援は未だ具体的な取り組みがないのが実状であるため、同様に、看護者への支援体制も整備されていない。たとえば、看護の基礎教育で国内の外国人に注目した看護を学ぶ科目もないし、外国人集住地区であっても病院施設の卒後教育で外国人母子保健についての知識提供を行っている施設も認められない。NPO/NGO の活動は、外国人当事者への支援でさえ十分とは言い難く、看護者への支援活動までは眼は向けられていない。

このように日本においては、看護者への支援体制が整備されていないことから、外国人へのケア提供は当惑が非常に強い。その多くは、外国人であることの状況を理解できないため、寄り添うことが困難であること、また対応のイメージ化が困難なために起こりうる課題の予測ができないことから、ケア提供のたびに問題を招いてしまう。そのため、医療における外国人対応の教育は、喫緊の課題であるといえる。

以上より、外国人医療において、外国人当事者への支援と同時に、受け入れ側の準備がなければ、医療における課題は解決が困難であることは容易に想像が出来る。

そこで本研究は、これまで注目されず準備不足であった医療における外国人の受け入れ側(看護者)の課題の解決のために取り組むこととした。

2．研究の目的

本研究は、看護者が様々な背景を持つ対象に対応できる「多文化共生の感受性を育む周産期看護者育成プログラムの実施と評価」を行うことであった。

3．研究の方法

研究計画は、3 年間(平成 25 年度～27 年度)を予定し、3 段階に区分して研究を進めた。

⑴ 平成25年度(第 1 段階)では、これまで作成したプログラムを基盤としたプログラム開発を行う。

⑵ 平成26年度(第2段階)では、本調査を行う。

⑶ 平成27年度(第 3 段階)では、研究結果のデータ分析から評価を行い、まとめをした後に普及をめざし国内外の学会や雑誌などに幅広く公表する。

プログラム評価では、プログラム提供の前後で看護者に質問紙調査を行い、効果を測定する。

4．研究成果

(1)平成25年度(第1段階)

プログラムの改訂のため、外国人医療専門家や日本に在住する外国人と会議を重ね、広く意見をもらった。また、教育プログラムの改訂と提供と並行して、外国人ケアへの意識づけを目的とした研修会「**ヘルスケア・カフェ**」**も企画した。平成** 26 年 1 月 31 **日に外国人母子保健の専門家を招聘し、「看護者が知っておきたいポイント-外国人患者への対応に関**する基礎知識＆外国人妊産婦への支援について-」を開催した。医療従事者、看護学生を含む

26 名の参加があった。

⑵ 平成26年度（第 2 段階）

平成26年8月23日に「多文化共生を育む看護者育成プログラム」の提供を行った。プログラムの目的は、1) 外国人へケアを提供するための知識をもつ、2) 外国人へのケアに対する意識が変化する、3) 外国人へのケアに対する態度が変化する、であった。プログラムは、講義とコミュニケーション演習で構成されており、講義内容は、日本における外国人の人口動態、外国人への看護について、外国人医療における課題と解決策で構成し、全体で 90 分間であった。パワーポイントと配布資料を用いて行った。コミュニケーション演習は、外国人模擬患者や医療通訳者の協力のもと、以下の 4 つの設定を用意し、1 つの設定につき 20 分間の演習を行った。2 名が模擬患者とコミュニケーションを行い、その他のメンバーが観察者となり 10 分間の演習を行い、その後フィードバックの時間を設けた。各設定にコミュニケーションを補助する資料やリソースが用意されており、参加者は自由にそれらを用いることができるようにした。プログラムへの参加者は、看護者、看護学生あわせて 35 名であった。

評価は 3 種類の質問紙を使用して行った。さらに、インタビューガイドに沿って半構成面接を行い、知識、意識、行動についての評価を行った。このデータを分析して、プログラムのプロセス評価とアウトカム評価を行った。

また、「ヘルスケア・カフェ」を平成 26 年度は 2 回開催した。①7 月 23 日「外国人患者にあっても困らない最低限の準備とは？」を行い、63 名の参加者があった。②8 月 24 日「医療英語の学び方-言語学の観点から-」は定員の 30 名に達した。

⑶ 平成27年度（第 3 段階）

「ヘルスケア・カフェ」外国人とのコミュニケーションちょっと自信をつける入門コースを実施した。対象は医療従事者、医療系の学生で、実施期間は平成 27 年 5 月～7 月で全 6 回行った。1 回 60 分とし、時間は 18：00～19：00 と勤務後に参加しやすい時間帯を設定した。プログラムの目的は、コミュニケーション力と異文化理解の向上とし、内容は、演習と中心に構成し、①不自然な間をうめるフレーズの練習 ②Simulated patient(SP)とのフレーズを使用した演習 ③在日外国人の患者体験のミニレクチャーを毎回行った。

それぞれの日程とテーマは以下のとおりである。

1) 5 月 29 日(金)：自己紹介する
2) 6 月　5 日(金)：病院を説明する
3) 6 月 12 日(金)：診察の流れを説明する
4) 6 月 19 日(金)：症状を尋ねる
5) 7 月 9 日(木)：病室の使い方を説明する
6) 7 月 23 日(木)：総合演習

毎回の参加者の内訳では 1 回目は3名、2 回目は33名、3回目は33名、4回目26名、5 回目17名、6回目14名で、合計人数は53名であった。参加者の満足度の平均は VAS（0～10）8.4 であった。

フォローアップ調査としてプログラム終了から約 7 か月後にプログラムの効果について、Web アンケートを行った。回答者は 24 名（45%）であった。外国人患者あるいは外国人への対応の際に「コースが役に立ったと感じたことはありましたか？」という質問に対し「はい」と答えた人は半数以上で 17 名（78.9%）であった。「またこのようなコースがあれば参加したいですか？」に対して、22 名（91.7%）が「はい」と回答した。このことから、今回のコースは外国人への対応に対する意識を変えることや自分自身で語学の学習や異文化を学ぶ、などのきっかけをつくることに貢献できたと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計２件）
早川 香織、五十嵐 ゆかり、外国人ケア向上のための看護者育成プログラムの評価、The ICM Asia Pacific Regional Conference、2015 年 7 月 21 日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

五十嵐 ゆかり、貝原 加珠、中島 薫、瓜生田 真理、外国人ケア向上のための「Healthcare café」の実践報告、第 10 回聖ルカ・アカデミア、2016 年 3 月 5 日、聖路加国際大学(東京都中央区)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
Healthcare café

https://www.facebook.com/Healthcarecafe%E4%BA%94%E5%8D%81%E5%B5%90%E3%82%86%E3%81%8B%E3%82%8A-496937423795081/?fref=ts

６．研究組織
(1)研究代表者
五十嵐 ゆかり(IGARASHI, Yukari)
聖路加国際大学・看護学部・准教授
研究者番号：30363849

(2)連携研究者
堀内 成子（HORIUCHI, Shigeko）
聖路加国際大学・看護学部・教授
研究者番号：70157056

明石 純一(AKASHI, Junichi)
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：30400617